

北 の 島

I 雪に埋もれた……

近 藤 良 夫

著 者 略 歴

1915年群馬県高崎市に生まれる。慶大文学部卒。中央公論社を経て、1942年日本放送協会（NHK）に入り、主としてラジオならびにテレビ・ドラマの企画、制作を担当。芸能局企画部チーフ・プロデューサーより、1967年から中央研修所勤務。埼玉県浦和市在住。

北の島

I 雪に埋もれた……

昭和四十三年十月二十日印刷
昭和四十三年十月二十五日発行

定価九五〇円

著者

近藤 良夫

発行者

柚 登美枝

印刷

鎌倉印刷株式会社

製本

岸田製本株式会社

発行所

株式会社

新樹社

東京都文京区目白台
一丁目二十三番五号
電話（941）二一〇三
振替東京五五七一九

I 雪に埋もれた……

一章

海は荒れていた。粉雪の舞う青錆色の急斜面を、連絡船はシャニムニ突進する。ペンキのハゲチヨロけた古い船体は、無様^{ふさま}にきしみつづけた。

やがて、たそがれ近い鉛色の空に、かすれた汽笛が響きわたる。船客たちはデッキに群がった。はるかな暗い海上に、小さな、にぶい銀色の島影があった。

中央が小高く丘陵となり、いちめん深い雪におおわれたその島は、北の海のどこにでもありそうな、ごくありふれた島に見えた。が、船が近づくと、島の周囲は鋭く切った断崖に囲まれ、さらにその周辺には牙のように尖った大小無数の岩礁が、泡立つ海面に突き出ている。

船は速度を落として岩礁のあいだを注意深く進み、断崖の下に辿^{たど}りついて迂回^{うかい}にかかる。雪ははげしく降りはじめた。

青年は舷側から吹き上げる雪に顔を叩かれながら、断崖のけわしさに眼を奪われていた。見上げるばかりの、赤褐色でゴツゴツとした柱状の岩肌——彼は船の鉄柱^{ポール}に身を支え、悠然と揺れ動く断崖をただ見迎え、見送るのだ。

彼は周囲に群がる同船の男女たちが、執拗に彼の表情を盗み見ようとしているのに気づかなかつた。彼らは彼を取り囲むふうになんまりあい、視線が合うとソッポを向く例のやり方で、性懲りもなく窺いつづける。防寒帽の頬当てをきつく締め、または作業帽ぐるみ手拭で頬かむりした男、顔じゅう襟巻を巻きつけた女たちが、潮風にただれた眼を意地悪く光らせていた。断崖のすさまじさに見入っていた彼が、ふっと屈託のない微笑を浮かべるのを見ると、彼らは奇^い立たしげに小突き合い、ささやき合う。誰も彼も足踏みしはじめたのは、はげしい寒気のせいばかりではないのだった。

船の横揺れ^{ヨリシ}を利用して、一人が彼に倒れかかった。するとそれを真似て、他のものもいつせいに彼を押しはじめた。身をかわす余裕もなく彼の身体は命綱に押しつけられ、足が宙に浮いて、あやうく海中へこぼれ落ちそうになった。彼が身をもがくと、なお面白半分に締めつけてくる。誰もが知らん顔で無暗に押しつけてくる。彼は懸命に鉄柱^{ボイル}を握り締めるが、いまにも手が離れ、海へ落ちそうなのだ。待ってくれ、理由もなくおれを押したりするな、あんたたちはこのおれのどこが……いったい、おれがなにをしたというのだ……？

その時、汽笛が鳴って、彼はようやく解放された。連絡船は岬のかげ、長くL字型に海へ伸びた突堤のなかへ廻り込もうとしていた。悪戯ものの船客たちは、あわてて下船の身仕度にかかる。

海のなかに引かれた純白の線——突堤のほぼ突端のあたりが繋船所らしく、雪の降りしきるなかで、数人の男たちが立ったままジッと船の着くのを待っている。ソリに繋がれた犬がわずかに動き廻っているだけで、その情景がユックリ近づいて来た。

船が接岸して、踏み板が架けられる。と、待ち構えていた船客たちは、青年を突き飛ばす勢いで突堤へ駆け降りはじめた。つぎつぎに彼を押しつけて踏み板を駆け降りる、駆け去る。またたく間に突堤には——犬ゾリさえ疾風の速さで雪のなかへ姿を消していた。

だが、彼は粉雪の柔らかく積もった夕闇の突堤をユックリ歩く。乾いた雪の快い感触。吹りしきる雪の紗幕を通して、かすかな風の音と、足許の岸壁に碎ける波の音と——。暗さは急速に増してきたが、急ぐ必要はないのだった。そう、急いだところで、まったくなんの意味もありはしない……。

彼は空を仰いで、大きく両手を広げる。絶え間なく雪片が舞い落ちる。切れ目なしに……。彼の心を幼い日の記憶がよぎった。……そう、あれは——小学校の、たしか六年のころ、課外授業、いや、当番で遅くなったのだ。鞆をしょって校庭に出たら、誰もいない広い学校の庭いちめんに、フンワリと真白い雪が積もっていた。——ワイイ、雪、雪だあ！……飛んで、跳ねて、駆け廻って、とうとう雪のなかにブッ倒れちゃった……雪はいいよなあ、雪よ降れふれ、ドンドと積もれ、ホーレ、眼玉ンなかに飛び込んで来る、冷てい、チべてえなあ……。ホーレな、身体がフウワリフウワリ、だんだんと舞い上がってくみてえだあ……。

彼は快活に手を振って、ふたたび雪のなかを歩きはじめる。彼は懐しげに微笑んでいた。

かすれた汽笛が聞こえた。連絡船の出航だ。ほんの一瞬、あたりが明るくなったのは、船のヘッド・ライトが照して過ぎたのに違いない。お役目で寄り道した雪と氷の島から、あの船はソクサ逃げ出してゆく……。だが、連絡船がもうやって来ようと来まいと、現在のおれにはまったく関係

のないことだ、関係のありようはずがない……。

雪はますますはげしく、風も出てきた。彼は突堤をほぼ渡り切った場所で立ち止まると、耳を澄ました。風と波の音との重なりあいだから、ふっと微かに、澄んだ鐘の音が聞こえるみたいなのだ。彼はひとりでに微笑む自分が判った。高く震えるような鐘の音につれて、彼の眼前に、冬の青空が現われてきた――。

……群青に気の遠くなるほど透き通った大陸の空、見渡すかぎりの広野だ。遠い鐘の音、ホーラ、汽車が来るぞ、遙か国境の掃いたように粉雪の積もっているあたりから……。青空に音の輪が拡がってゆく……。煙の音も聞こえはじめた……。おれはデッキにいる、駅に着くのを待ち構えている。

徐行して、列車は止まった。駅の横手から、やっぱり彼女だ！ 妹と息を切らして駆けて来る。牛乳入りの缶を捧げるように持って、揃いの真赤な頭布フタトクが可愛い。

――牛乳、牛乳はいかが？ しぼり立ての牛乳召し上がれ！

鐘が鳴っている。もう出発だ。列車はユックリ動き出す。それまでまったく知らん振りしていた彼女が、まっしぐらにデッキのおれのところへ駆けて来る。列車といっしょに早足に歩きながら、淡いトビ色の眼でおれを見詰めて、早口で言う。

――ナ パスフー パルチュー オットアップスク（復活祭には休暇を取るのよ、ジュドゥー チェピヤー（待つてるわ）。

妹も姉の後から走りながら、片目をつむって、甘え声で言う。

——ニエ　ザブージ（忘れちゃ駄目よ）！

——ダア　ダア（ええ、ええ）。

姉妹はおれを放りばなしで追駆けっこしはじめ。が、すぐ気づいて、こっちに手を振る。二人で両手を振り、頭布^{フット}を振り、豆粒みたいに見えなくなるまで振っていたが……。

彼は目をしばたいた。道はかなりの傾斜となったが、島の人たちの通ったあととはわずかな凹みとなって残っているだけで、横なぐりの雪のなかでそれを辿っていくのはかなり難しい。だが、彼は一と呼吸深く息を吸い込むと、爪先に力をこめて登りはじめた。

雪は意外に深かった。たちまち膝まで沈んでしまい、一と足ずつ交互にユックリ足掛りをつけながら進むしかない。彼は立ち止まってはこわばる両頬を手のひらで叩き、その手を打ち合わせて、また歩きはじめる。岩角をよじ、灌木の枝にすがって、彼はひたすらに登りつづけた。

長い時間が過ぎた。彼らの歩いた、おそらくは何倍もの時間。ようやくのこと尾根に辿りつけたように思う。額の汗を拭いながら、二、三步よろけ出た時、彼は思わず喜びの吐息を洩らした。

眼の下はるか、丘陵が急に海に迫るあたりに人家の灯があった。荒あらしい北洋の海鳴りのなかで、貧しげな灯が海岸にへばりつく具合に点々ととり、雪にかすれて頼りなげにまたたいている……。

島でただ一軒の宿屋の亭主は、帳場のある部屋のイロリ端で、さっきからスッカリ考え込んでし

まっていた。普段自慢の赤犬製のチョッキの裾に、煙草の灰が落ちるのにも気づかないほどに。おどけた八字眉のあいだに深い皺を刻み、いくら顎にキセルを押しあててみても、いっこうにいい思案は浮かばないのだった。

今夜という今夜ほど島で宿屋はたった一軒、自分の家しかないということが癪に障ることはなかった。いままでにねいこった。この冬場、どう気を廻してみたところで、どだいよほどの気紛れもンしか旅行になんかやってくるわけがねいのだ。——問題は、その若い衆が、おれのこの家に泊りに来るにちげいがねい、つう……いって、島の衆は騒ぎ過ぎるつうもンじゃねいのか、案げい、気楽で物好きな都会の若い衆かも知れねい。別して冬枯れのこの時節に、有難ていお客さんにやちがいはねいんだ。この雪の晩、客でせいありゃ御の字ちゅうもンだ。けんども……選りによって雪の時に、見物するにも事を欠いて……フム。——だがこの妙にけたくその悪りい、まるで押しつぶされそうみていな気分つうもンは、どうしたこつたい。——老人はまた恐るおそる障子の覗きガラス越しに玄関を透かして見る。

やはり異常はなかった。彼は深い吐息を洩らした。……自殺しに来た？ みんなが自殺志願者に違いいねいと言う。そういう類の若いもンの扱いにやこれでもよっぽど馴れているつもりだが、さて、選りによってこの時期に、自殺志願たあ……。なあに、別に兇悪犯が乗り込んで来るつうわけのもンでもないしよ、なんの若造の一人や二人……。

その時、軒燈のあかりの輪のなをなにかが横切った。たしかに黒い人影。——来た！……

彼は無意識にチョッキの裾で手のひらの脂を拭っていた。

その人影はいったんゆきすぎたが、すぐ玄関の前に戻って来て、凍てついたガラス戸を押し開けにかかった。挨拶もなしに入って来て、土間に靴底の雪を叩きつけはじめ……。なんてやつだ。老人は咳払いしてユックリ立ち上がると、障子を開けて、ノッソリと式台に出ていった。

都会風の若い男だ。色の生っ白い、だがなかなかの色男……。立ちはだかるように突っ立つ老人に向かつて、相手は人なつこげな微笑を見せ、ユックリと頭を下げる。

主人も反射的に頭を下げるしかない。若い客はただニコニコしていた。幼い子供が大人の好意的な指示を期待する時みたいないな、めっぽう無邪気な態度なのだ。

「お待ちもうしておりましたですて」

と、老人は愛想よく言ってしまった。

「この雪ンなか、よくまあ、ひとりで来なすったもンだ。前もって知らせてさえくれりゃ出迎へにね、雪に馴れねいもンで苦勞しなすったろう。さ、ドンぞドンぞ」

季節はずれの珍客はイロリ端に案内されると行儀よくキチツと膝を揃え、改めて主人に向かつて丁寧な頭を下げた。そのあと半ば眼を閉じ、放心したように深い呼吸を繰り返している。雪と汗で濡れた長髪を、広い、青白い額に垂れたまま。まだ学生でもあるようなつましい服装、整った目鼻立ち、肌理きめのこまかい顔全体が少女のように紅潮していた。

老人はなんとなく咳払いした。ストーヴの火を新聞紙の紙の切れはしでキセルに移しながらも客

の様子から眼を放さず、彼は言った。

「——船は揺れたスカ？　なにね、妙ですよ、冬場ンなと、お客さんが恋しくってねい。宿料なんぞいらねい、つう気分でさあ」

フエフエと老人は笑った。

「広い国じゅうでも、まずこの辺ぐれいかしれんもンね。なんしろ海ンなかの島だもんで、世間のうるせい風もここまじゃあ、ねい。——それにしても運の強え人だ。あのオンボロ船ときた日にゃ、島とつい目と鼻ン先い来て、そのまんま引っけえすことが数ありますもンね。潮の具合がどうのこうのといい加減なゴタク並べるだも……なあに、てえーんで、ハナからぜひと島に寄ってやろう、つう親切気がねいンですて——」

フエフエとまた彼は笑ったが、自分の声が妙に上ずる具合なのが気になった。客が睫毛の長い、深い青味を帯びた大きな眼でジッと見詰めるのが彼をとまどわせるのだ。主人はキセルをスパスパと吸い、咳払いをして、また喋りはじめた。

「島はどうスね？　氣に入ったスカねい？　静かでしょうが？　雪ンなかだでね、まんずノンビリしたもんでさ。なーんも取得のねい島だもよ、ま、真面目にやってさえいりゃ間違いいねい、ちゅうこンで。——よっく来てくださった、まったくありがていこンで。ヘンピな島なもンで、都会地の方には途方もなく……いやあ、いい時に来なすった、とよ。なんしろ都会地の話にゃ餓えてるもンね？　心配はいらねいステ。都会地じゃ隣ン部屋に人殺しがいても判らんそうながねい。島は

せめいだけ安心だもンね、みんな氣心が知れてますで。

——わしゃあもう、無暗と嬉しくてねい。あんさんも、別に入れ知恵されて、やって来たわけじゃねいだろうし、夏場、島い来るお客さんたちがよく、いい空気を存分吸いたくて来たってね、たまにゃあ息抜きしていいもン。腰い落着けて、ユックラ静養してってくださいや。……正直な話、この雪ンなかおっぼり出されたところで、どこいもいきようがねいよね？ お客さんの方じゃ、旅行案内どうり、勝手な時に島に来て、また好きな時出ていけるつもりでも……島い上がっちゃったからにゃ、もう、わしらと親戚になったつもりでねい」

相変らず相手は口をつぐんだまま、ジョーッと見詰めるだけなので、老人はますます落着かなかつた。彼はヘソのあたりに力を入れ、冷静になろうとしたが、口のほうは逆にまったく余計なことを喋りはじめていた。

「そいで、中央のほうはどうですかい？」

「……………」

「いえね、学生さんやら労働者やら、なんだか若けい連中が大騒ぎしちゃって、あちらさんの車に火いつけたり、ヒックリ返しちまったり、大学の先生みてい偉れい連中まで敵だ味方だつうふうに分れちまって、もうまーるで戦争みていだってねい？ わしらにゃなンとも縁のねい話だども。ここンとこ新聞も着かねいもンで、からきし事情は判んねいしよ。——それにしても戦争の苦勞もよく知りもしねい連中が騒ぎ起こすなんてねい。条約、調印したのがいいとかいけねいとか、全面

講和がいいの悪いのと、いっくら騒いだところで、もう調印しちゃったものをどうできるこつてもねいしよ。警官^{カンク}さんと根棒振り廻して渡り合ったそうだが、馬鹿なことをするよねい。なしてそう心得ちがいの人間がメタヤタラ騒ぎ出したもんだか——。戦争で負けて、やっとここまで立ち直れた苦勞、ありがたさつうもンが、カラ判らねいんだ。これじゃ法律もなんもあつたこっちゃねいやな。身のほど知らずつうもンだ。怪我した連中はけえって葉ンなろうが、死んだりしたもンは浮かばれめいよねい」

客は黙りこくっていて、いっこうに反応を示さないので、老人は咳払いをし、真正面から客の顔を覗き込んで、いかにも考え深かそうな低い声で尋ねた。

「いくつだね？」

「………」

「二十六、いや二十七か？ 違う？ じゃ三十……いや二十九——ふうん」

彼は相好を崩した。

「二十八だな？ ウへへ、どうだ、当たったろう？ 兵隊にや——いかんかったらうなあ。いや、いったかもしれん。どこでいったい？ どこで戦争に……。どうもいまの若いもンは……戦争にいったこともねいもンで、どういうもンだか、この、たあだヤミクモに戦争がいけねえのなんのとなあ」

「……………」

客はただもの問いたげに見詰めている。当惑して、煙草に火を点^つけた老人は、愛想笑いをした。彼はわきの小机から宿帳を取ると、頭を下げて、捧げるように客の前に置く。客は鉛筆をとると、一瞬小首をかしげたが、すぐスラスラと淀みなく記入して、これも礼儀正しく宿帳の向きを変えて差し出した。老眼鏡をかけて待ちかまえていた老人は、交互に宿帳と客の顔とを確めて見ながら、ふいに、

「——さん」

と、呼び掛けた。が、相手は羞^{はにか}かんだ、あいまいな微笑を見せただけで、そうだとも違^{ちが}うとも答えようとしない。それどころか、誰でもいいじゃないかと言いたげにも見てとれる。老人はまた咳払いして、

「やっぱり二十九かいね、見かけよか、ズーンと若けいようにみえるだが。苦勞しなすったんだねい？ 中央の、それも通信社にお勤めじゃ、いろいろと面白い話をねい。こんどのいろいろな……いえね、ありがていこつてさ。わしゃあんたみていな学問のある人にいつまでも島においてほしい、島のもの仲間になつてもらいていんでさ」

「……………」

「なンしろ、島にや娛樂つうもんがねいもんで。だども酔狂な、とはあんたさんのことですて。自分から島流になるとはな。下手に時化^{しげ}つづけると春まで帰れんかも知れんが。なンしろ、いまは雪が深いでう。無人だものねい。あんたさんのいきていっつう燈台のあたりにや家つうほどの家

もねい、泊めてもらうところはねいすつと、それこそ無理していきやあ凍え死にだあ。ま、命が惜しきやよ、フェフェ。——独りもンかね？ 女房持ちじゃ許してくれませんや。フェフェ……、ご両親はお元気なんですかい？ ま、旅行に出るのに、いちいち親の承諾のいる年でもあるめいが、フェフェ、ほんとうに、よく来なすつた——」

立てつづけに喋っても、相手は聞いているのかいないのか、時たま微笑しながらうなずくだけだ。主人は精いっぱい愛想顔で話しつづける。

「この、なんだよなあ、人間つう奴は、たまさか他人があつと言うようなこと、しでかしてみたくなる時があるそうなが」

咳払いして、

「この島の北の端にゃあね、たしかに青い光を出す燈台があることにゃああるけども。けど青色の燈台はこの島だけですかい。なして、この島のンを見ていンでがすね？ いって、この雪ンなか、なにしに来なすつただね？ ただフラァと島になあ。この島に来なすつたわけはね？」
若い客はうつ向いて燃えさかるイロリの火を見詰めている。やがて顔を上げたその顔は、子供みたいにニコニコしていた。口ごもるような、低いもの静かな言い方で彼は言う。

「雪を見たくて……、フラァと旅に出たのです……。この島の雪は飛びきり綺麗というので——
当分、あるいはこの冬最後の連絡船になるかもしれないというもので……。それこそ夢中で飛び乗りました。来てよかった……」